

漢詩の知識 まる見え1枚シート

形式と押韻と対句と名詩人 — この1枚で漢詩の「見方」が全部わかる。難しそうに見えて、覚えるルールはほんの少しです。

★★★ 入試超頻出

★★ よく出る

★ 余裕があれば

💡 覚え方

▶ 例文

① 形式を見分ける

▶ ② 何句・何字か数える

▶ ③ 押韻を確かめる

▶ ④ 対句を探す

▶ ⑤ 詩人と内容をつかむ

まずは「何句・何句の詩か」を言えるようになるのが第一歩。設問の半分はここで解けます。

読む順：左の列を上から順に ▶ 終わったら 右の列へ（見出しの番号が順番です）

① まず大きく2つに分ける（古体詩と近体詩）

分類	時代	ルール	頻出度
古体詩（こたいし）	唐より前が中心	句数・字数・押韻が自由（決まりがゆるい）	★★
近体詩（きんたいし）	唐以降に完成した形	句数・字数・押韻・対句がきっちり決まった定型	★★★

💡 「近体詩=新しい（唐以降）のにルールが厳しい/古体詩=古いのに自由」と逆っぽく感じるの要注意。入試で問われるのはほぼ近体詩です。

② 近体詩の4種類（句数 × 字数）

近体詩は「何句か（絶句・律詩）」と「一句が何字か（五言・七言）」の組み合わせで4種類に分かれます。

	一句が5字=五言	一句が7字=七言
4句=絶句	五言絶句（ごごんぜつく）	七言絶句（しちごんぜつく）
8句=律詩	五言律詩（ごごんりっし）	七言律詩（しちごんりっし）

💡 「句の数」=縦の長さ / 「言（字数）」=横の長さ。絶句は4句で短く、律詩は8句で長い。一句5字なら五言、7字なら七言。これを掛け合わせるだけ。

③ 絶句の構成 — 起承転結（4句）

句	名称	役わり
第1句	起句（きく）	うたい起こす（場面を始める）
第2句	承句（しょうく）	起句を受けて続ける
第3句	転句（てんく）	話をぐっと転じる（場面・視点を変える）
第4句	結句（けつく）	全体を結ぶ（しめくくる）

💡 「起・承・転・結」=作文でおなじみの構成そのもの。第3句の転句で内容がガラッと変わるのがポイント（ここに作者の心情が出やすい）。

④ 律詩の構成 — 4つの聯（8句）

律詩は8句を2句ずつ4組に分け、それぞれを「聯（れん）」と呼びます。

句	名称（聯）	読み	備考
第1・2句	首聯	しゅれん	うたい起こし
第3・4句	頷聯	がんれん	対句にするのが原則
第5・6句	頸聯	けいれん	対句にするのが原則
第7・8句	尾聯	びれん	しめくくり

💡 「首（あたま）→頷（あご）→頸（くび）→尾（しっぽ）」と体の上から下へ順に並ぶと覚える。真ん中の頷聯・頸聯が対句になる、と一緒に押さえる。

⑤ 押韻（おういん） — 同じひびきで句末をそろえる

押韻とは、決まった句の末字（いちばん下の字）を、同じひびき（韻）の字でそろえること。

形式	押韻する句末	頻出度
五言の詩	偶数句末（第一句末は踏まないことが多い）	★★★
七言の詩	偶数句末+第一句末も踏むことが多い	★★★

💡 基本は「偶数句の末字で韻をふむ」。あとは五言=1句目は踏まない/七言=1句目も踏むと上乗せで覚える。

💡 韻の位置イメージ（○=押韻する句末）
五言絶句：1句 — / 2句 ○ / 3句 — / 4句 ○
七言絶句：1句 ○ / 2句 ○ / 3句 — / 4句 ○
五言律詩：2・4・6・8句が○（1句は—が多い）
七言律詩：1・2・4・6・8句が○

▶ 例文：孟浩然「春暁」（五言絶句）
春眠不覚暁（ギョウ） / 処処聞啼鳥（チョウ） / 夜来風雨声 / 花落知多少（ショウ） → 第2句末「鳥」・第4句末「少」で押韻。※五言では第1句末を踏まないのが原則だが、この詩は例外で第1句末「暁」も同じ韻を踏んでいる（暁・鳥・少が同じひびき）。

⑥ 対句（ついく） — 形をそろえて並べる

- 対句とは：2つの句で、同じ品詞・同じ組み立ての語を位置をそろえて並べる技法（名詞→名詞、動詞→動詞…）。
- 律詩では：頷聯（3・4句）と頸聯（5・6句）を対句にするのが原則。
- 絶句にも対句は使えるが、必須ではない。

▶ 例文：杜甫「春望」より（頷聯）
感時花濺淚（時に感じては花にも涙を濺ぎ） / 恨別鳥驚心（別れを恨んでは鳥にも心を驚かす） → 「花→鳥」「涙→心」のように語が対応=対句。

💡 「律詩の真ん中（頷聯・頸聯）は対句」と1セットで暗記。設問「対句になっているのはどれか」は、まず3~6句目を疑えば当たりやすい。

⑦ 句の区切り方（読みのリズム）

字数	区切り	イメージ
五言	2字 + 3字	春眠 / 不覚暁
七言	4字 + 3字（さらに2+2+3も）	朝辞白帝 / 彩雲間

💡 どちらも「後ろが3字」で終わるのが共通点。五言は前2字、七言は前4字。書き下しや訓読のときの意味の切れ目に役立つ。

⑧ 平仄（ひょうそく） — 名前だけ知っておけばOK

- 漢字の声調（音の高低・上がり下がり）を平声（ひょうしょう）と仄声（そくせい）の2種に分け、その配置の決まりを平仄という。
- 近体詩はこの平仄の並びにもルールがあるが、高校段階では「そういう決まりがある」と名称を知っていれば十分。細かい配列は問われにくい。

⑨ 代表的な詩人（中国）

詩人	呼び名・別名	時代	一言	頻出度
▼ 唐の詩人（盛唐～中唐）				
李白（りはく）	詩仙（しせん）	盛唐（8世紀）	自由で雄大、酒と月を愛したスケールの大きい詩風	★★★
杜甫（とほ）	詩聖（しせい）	盛唐（8世紀）	戦乱の世を見つめた重厚で誠実な詩風。律詩の名手	★★★
白居易（はくきょい）	字は楽天=白楽天	中唐（8～9世紀）	平易でわかりやすい詩。「長恨歌」が有名。日本でも愛読された	★★★
王維（おうい）	「詩仏」とも	盛唐（8世紀）	自然・山水を静かに描く。画家でもあった	★★
孟浩然（もうこうねん）	—	盛唐（7～8世紀）	自然や田園をうたう。「春暁」が代表作。王維と並び称される	★★
▼ 唐より前の詩人				
陶淵明（とうえんめい）	陶潜（とうせん）とも	東晋～南朝（4～5世紀）	役人をやめ田園に隠れた「田園詩人」。「帰去来辞」が有名	★★

💡 「李白=詩仙/杜甫=詩聖/白居易=白楽天」の3点セットは最優先。李白も杜甫も同じ盛唐（同時代の親友）、陶淵明だけは唐よりずっと前（東晋）と時代をセットで覚えると混同しません。

💡 「仙人の李白/聖人の杜甫」と1字で区別。スケール大きく自由なのが仙（李白）、まじめで重厚なのが聖（杜甫）。

⑩ 解き方の最終チェック（設問が来たら）

- 句数を数える：4句なら絶句、8句なら律詩。
- 一句の字数を数える：5字なら五言、7字なら七言 → これで「○言○句の詩」が確定。
- 句末を縦読み：偶数句末がそろっていれば押韻（七言は1句末も）。
- 真ん中を見る：律詩なら頷聯・頸聯が対句か確認。
- 作者と詩仙・詩聖などの呼び名・時代をひもづけて答える。